

だるまの町づくり プロジェクト企画展

第2回 高崎だるま展

— だるま職人の町・だるまの里のおいたち —



ようこそ
だるまの町へ

TAKASAKI DARUMA

小学生の
絵付だるま
大集合



※写真は参考作品です。
実際の展示作品とは異なります。



木型と生地



高崎だるまの歴史と
だるまができるまで

くろ猫のタンゴ



ぐんまちゃんだるま



たか丸くんだるま



伝統だるま
創作だるま



平成27年10月2日(金)～7日(水)

午前10時～午後6時(最終日は午後4時まで) 〈入場無料〉

高崎シティギャラリー2F 第5・第6展示室

〒370-0829 群馬県高崎市高松町35-1 TEL 027(328)5050

主催 群馬県達磨製造協同組合
主管 だるまの町づくりプロジェクトチーム
後援 高崎市 高崎市教育委員会
高崎観光協会 上毛新聞社

「高崎だるま®」は群馬県達磨製造協同組合の登録商標です。



高崎だるまのキャラクター
「たか丸くん」
TM

だるまの町づくりプロジェクト企画展

第2回 高崎だるま展

——だるま職人の町・だるまの里のおいたち——

平成27年 10月2日(金)～7日(水)
午前10時～午後6時(最終日は午後4時まで) (入場無料)
高崎シティギャラリー1・2F 第5・第6展示室

第2回高崎だるま展開催にあたって

高崎だるまは、二百数十年の時を経て、職人の伝統の技と上州(群馬県)の気候風土が生み出した「故郷(こころ)」そのものと言えるでしょう。

今や高崎のみならず群馬県や日本を代表する「だるま」として、全国のだるまを牽引する存在となっています。

現在、だるまの型を作る職人、高崎だるまや様々な創作だるまを作る職人を合わせて51戸71人が群馬県達磨製造協同組合に登録されています。大正4年(1915年)に現在の達磨組合の前身となる「碓東たいとう」達磨製造協同組合が発足してから100年を向かえました。今回の展示は、高崎だるまが生み出され今日に至るまでの歴史を中心に、だるまが出来るまでの工程を木型や機具や写真等で解りやすく表現しました。

様々な時代で巡り合った人々の写真やだるま市などの写真や絵画も見ていただきたいと思います。

また、だるま職人が現代に込めた創作だるまの数々も是非ご覧いただきたいと思います。

更に今回は、だるまの里である豊岡地域・八幡地域・板鼻地域の小学校5校の児童生徒の皆様にも参加をいただき、様々な個性あふれる作品を展示することができました。

この第2回の高崎だるま展に沢山の皆様にお越しいただき、「達磨」「だるま」「ダルマ」「DARUMA」と向き合っていただけでしたら幸いです。



達磨大師とは

紀元前四世紀の終わりごろ南インドの香至国という豊かで平和な国の第三王子として生まれました。やがて出家し、お釈迦様からの教えを継ぎ、より多くの人々にこの教えを広めようと、幾多の困難にもめげず海路はるばる中国へ布教伝導に渡られました。どのような逆境に立っても、決してへたれず、現在の禅宗の基礎を築かれ、初祖達磨大師と言われるようになりました。達磨大師の逸話は沢山ありますが、高山少林寺での「面壁九年」は有名で、九年もの間ひたすら座禅を続けられました。

初めは、達磨大師のお姿を描いた座禅の形でしたが、養蚕の発達とともに、繭の形に似た縦長の繭型だるまに形がかわってきます。上州は、昔から養蚕の盛んな地域で、蚕は繭を作るまでに4回脱皮しますが、蚕が古い殻を割って出てくることを「起きる」と言います。この言葉にかけて、養蚕農家では七転び八起きのだるまを大切な守り神として奉り続けてきたのです。養蚕の大当たりの願かけから、やがて一般家庭へと広まり、様々な願かけが行われるようになりました。別名「縁起だるま」「福だるま」「祈願だるま」とも呼ばれる高崎だるまは、こうした時を経て郷土のみならず日本を代表する「かけがいのない」存在となりました。

高崎だるまの起り

高崎だるまは、今から二百数十年前の寛政年間(1789年～1801年)に碓氷郡豊岡村の豪農・山縣五郎によつて生み出され今日まで作り継がれてまいりました。初めは、少林寺達磨像の東阜心越禅師の描かれた一筆達磨像のお姿を型取った座禅だるまでした。その製法は山縣家の秘伝とされ受け継がれてきましたが、明治に入り木型名人の輩名鉄十郎盛幸が豊岡村に住み始め、だるまの木型を専門に彫り始めます。これにより豊岡地内にだるま作りを目指す者が増え、大勢の人が作り始めるようになりました。これが高崎だるまのおいたちです。

また、そのだるまは、少林寺達磨寺が創建当初から続いている七草大祭で売られるようになりました。これが「だるま市」の始まりです。

だるまの豆知識



だるまはなぜ赤い

赤色は、禅宗の開祖である達磨大師がまとっていた赤の法衣の色を表しています。また、だるまの前面に描かれている金色の模様は袈裟を意味しています。江戸時代、赤い色は病を治すと言われ、伝えられ、疱瘡除けとして庶民に重宝されました。また、だるまの手と足は座禅の最中はその法衣の中に隠れ見えないう姿となっています。

だるまに目を

開眼のしかたは、まず、だるまさんに向かい合い、心を静め、願いを込めてだるまに向かつて右側の目(だるまの左目)から願いをなぞるように墨で書き入れます。そして、一年間無事に過ごせた時、あるいは願いごとが叶えられた時に感謝の心を込めてもう一方の目を入れます。



高崎だるまの商標登録

高崎だるまが全国に波及し、日本有数の産地になるにつれ、県・市を代表する特産品として郷土の生んだ伝統工芸品となりました。その匠の高度な技術に対して平成11年度より「群馬県ふるさと伝統工芸士」が制定され、現在5人の方々が認定を受けています。また、群馬県指定のふるさと伝統工芸品として平成5年に認定を受け、県内では第1号となる地域団体商標登録を第5003697号で「高崎だるま」として全国唯一だるまの地域ブランド登録を行っています。

高崎だるまは、まさに日本を代表するだるまと成長し、海外からも注目を得るようになりました。その為、台湾(2015年2月1日)・中国(2015年2月21日)におきましても、商標登録を行っています。



だるまのできるまで

「だるま」が出来上がるまでには、何十工程もの流れが必要です。繰り返し繰り返し丹精込めて作っていきます。今では、一部機械化してきたところもありますが、依然として伝統の手法を守り、一つ一つ手作りによって作られています。

- 1 へった作り
- 2 張り子生地(だるま張り型抜き)
- 3 へった付け
- 4 白塗り
- 5 赤塗り
- 6 面粉塗り
- 7 すりこみ
- 8 目
- 9 鼻まわし・口書き
- 10 目まわし
- 11 金書き
- 12 ひげ書き



会場では実物のだるまが多数展示しております!

